



TITLE:

股關節部位ノ疾患ニ對スル診斷ニ就テノ注意(其二)

AUTHOR(S):

伊藤, 弘

CITATION:

伊藤, 弘. 股關節部位ノ疾患ニ對スル診斷ニ就テノ注意(其二). 日本外科宝函 1925, 2(3): 485-488

ISSUE DATE:

1925

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193160>

RIGHT:

臨 床

股關節部位ノ疾患ニ對スル診斷ニ就テノ注意 (其二)

京都帝國大學教授

醫學博士 伊 藤 弘

前號ニ於テ視診上先ヅ患者ヲ裸體ノ儘歩行セシメ其歩行ノ様子ヲ注意シテ診斷ノ補助トナスコトヲ述ベマシタガ今回ハ歩行シ得ラル、患者モ歩行シ能ハザル患者モ裸體ニテ仰臥セシム其際患者ヲシテ外部ヨリ何等強制的位置ヲ取ラシメズ患者ガ欲スルガ儘ノ自由ノ位置ヲ取リテ之ヲ觀察スルコト肝要ニシテ患者ノ體位、患側下肢ノ浮腫、羸瘦ノ程度、長短ノ如何、屈曲內翻、內旋外翻外旋ノ位置、大轉子ノ位置ノ上下、膨隆乃至陷凹、及ビ股關節部局所ノ腫張乃至陷凹ノ程度ニ就テ充分ノ視診上ノ注意ヲ拂フコトガ必要デアル。

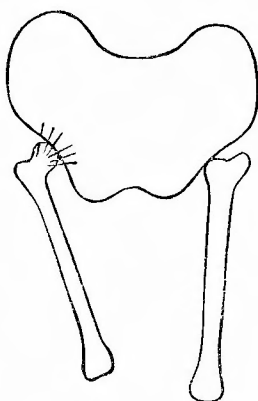
先ヅ患者ノ體位特ニ腰部前彎ノ程度ヲ見ルニ股關節ニ彎縮ヲ起サシム可キ疾患例ヘバ股關節結核、急性股關節炎ノ如キハ多少ニ拘ラズ腰部前彎ノ程度ヲ増加ス既ニ關節強直ヲ起セルモノハ其大多數ニ於テハ強度ノ腰部前彎ヲ呈ス但シ下肢ヲ屈曲シテ屢々腰部前彎ノ程度尋常ナルガ如ク假裝セルモノアルヲ以テ注意ヲ要ス。

患側下肢ニ著明ノ浮腫アル時ハ股關節部ニ強度ノ炎症、挫滅、強度ノ出血等アルヲ想ハシム、羸瘦ノ程度ニ就テハ苟クモ股關節部ニ疾患アル際ハ患側下肢ハ健側下肢ニ比シテハ多少ナリトモ羸瘦ノ存スルハ誰レシモ理解シ得ラル所ナルモ先天性股關節脫臼、股關節癱瘓質斯、股關節內翻症、外傷性股關節脫臼乃至骨折等ニ於テハ萎縮ノ程度比較的輕度ニシテ(勿論病症ノ程度及ビ長短ニヨリテ相異アルモ)股關節結核ノ際ハ萎縮ノ程度ガ強度デアル。

長短ノ如何ニ就テハ患者ハ屢股關節及ビ膝關節ニ於テ屈曲位ニアルヲ以テ其ノ眞ノ長短ヲ知ルコト困難ナルモ、先天性

股關節脫臼ノ場合ノ如ク兩側下肢路ボ平行ニアル際ハ兩側足蹠及ビ兩側内踝ノ位置ノ比較ニテ其長短ヲ知ルト同時ニ何レノ側ニ先天性脫臼ガ存在スルカ推定シ得ルナリ、股内翻症、股外翻症、病的乃至外傷性股關節脫臼、及ビ大腿骨頸骨折等モ同様ニ一見シテ何レノ側ガ患側ナルカラ知得スルノデアル、然シナガラ茲ニ特ニ注意ヲ要スルコトハ視診上ニ於テ長ク見ユルトモ眞ニ長カラザルコトアリ、又反對ニ短ク見ユルトモ眞ニ短カラザルコトガアル、之ハ屢股關節結核ニ遭遇スルコトニシテ例ヘバ患側下肢ガ股關節ニ於テ内翻位ニ彎縮或ハ強直ヲ起セル際ニハ患側ノ骨盤ハ健側ニ比シテ高位ヲ取

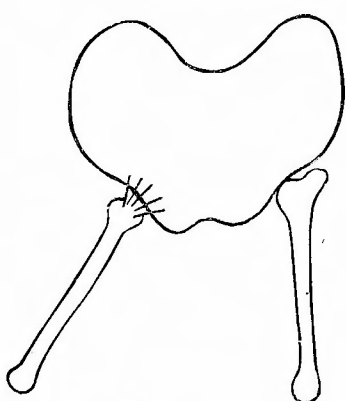
(圖 一 第)



(患側)

第一圖ハ患側
下肢ガ内翻位
ニ強直セル模
型圖

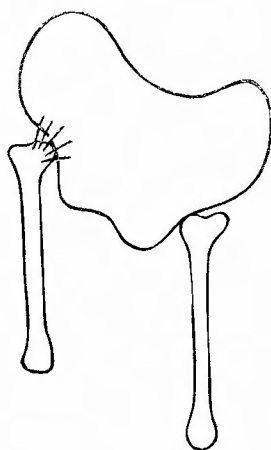
(圖 參 第)



(患側)

第三圖ハ患側
下肢ガ外翻位
ニ強直セル模
型圖

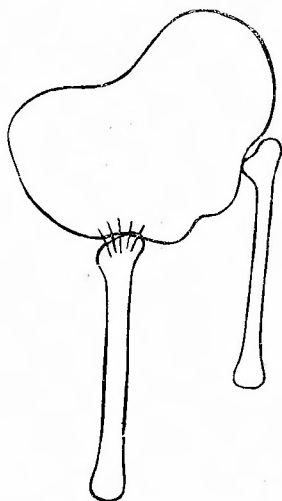
(圖 二 第)



(患側)

第二圖ハ骨盤
ヲ高位ニ保チ
健康下肢ト平
行ニシテ恰モ
患側下肢ガ短
縮セルガ如ク
見ユル模型圖

(圖 四 第)



(患側)

第四圖ハ骨盤
ヲ低位ニ保チ
健康下肢ト平
行ニシテ恰モ
患側下肢ガ延
長セルガ如ク
見ユル模型圖

リ以テ患側下肢ト健側下肢トヲ平行狀態ニ置クヲ以テ恰モ患側下肢ガ短縮セルカノ如ク見ユルノデアル、之ニ反シテ患側下肢ガ外翻位ニ在ル時ハ患側骨盤ヲ低下シテ兩側下肢ヲ平行ナラシムルヲ以テ恰モ患側下肢ガ延長セルガ如ク見ユ、然シナガラ眞ノ長サニハ變狀アルニ非ラズシテ單ニ骨盤傾斜ニヨリテ其長短ヲ假裝スルニ過ギナイ、注意セザル可カラズ。

次デ股關節並ビニ膝關節ノ屈曲内翻内旋外旋ノ位置ニ就テ觀察スルニ股關節炎ヲ起セル最初ノ時ニハ其慢性疾患タルト急性疾患タルトヲ問ハズ大多數ノモノニ於テ股關節及ビ膝關節ヲ輕度ニ屈曲シ、下肢ヲ輕度ニ外翻外旋ノ位置ヲ保持テ仰臥スルノデアル、之ニ關シテ面白イ事柄ハ小兒ニ於テ大腿骨上部急性傳染性骨髓炎ノアル際ニ小兒ハ患肢ヲヨク眞直ノ位置ニ伸展シテ仰臥セルモ急ニ何等ノ誘引無クシテ股關節ノ屈曲ト患肢ノ外翻外旋ノ位置ヲ取ルニ至レバ其急性炎症ガ股關節腔内ニ擴張シターツノ證據ニナルノデアル。又慢性疾患例ヘバ股關節結核ニテハ極最初ノ時期ニハ股關節ヲ單ニ屈曲スルノミカ或ハ僅カニ外翻位ヲ取ルガ疾患ノ増惡ニ伴ヒテ股關節ノ屈曲ノ程度ヲ増加スルト同時ニ患肢ハ外翻外旋位ヲ取ル之ニ反シテ末期ニ於テハ多クノ場合股關節ニテ屈曲シテ患肢ハ内翻内旋位ヲ取ル故ニ股關節ノ屈曲ノ程度並ビニ患肢ノ外翻外旋内翻内旋ノ位置ノ視診ノミニテ股關節結核ノ時期程度ヲ略ボ推知スル事ガ出來ル。

股内翻症ノ際ハ勿論大腿骨頸ノ屈曲ノ程度ニヨリテ異ナレドモ患肢ハ短縮シテ通常輕度ニ内翻内旋位ヲ取ル、外傷性股關節脱臼ノ際ハ其脱臼ノ種類例ヘバ後方、前方、上方、下方脱臼ニヨツテ各々其位置ヲ異ニスルモノデアルガ大腿骨頸骨折ノ場合ハ關節囊内骨折ト關節囊外骨折トヲ問ハズ常ニ患肢ハ外旋位ヲ取ル、之ハ單ニ力學的關係ニシテ健體ニ於テモ股關節部ノ支持點ヲ離斷スル時ニハ下肢ハ下肢自己ノ重量ノ爲メニ外旋位ヲ取ルノデアル、故ニ大腿骨頸ニ骨折アリテ其重量ノ支持點ヲ失フ時ハ外旋位ヲ取ルハ當然ノ事デアル、之ト同時ニ大腿骨頸ニ骨折ガアツテモ其骨折ノ兩端ガ相互ヒニ喰合ツテ居ル場合ニハ位置ノ變化ヲ來タサルモ至當ノ事デアル、大腿骨頸ノ關節囊外骨折ノ場合ハ普通下肢短縮ノ程度極メテ強度ナルニ反シテ關節囊内骨折ノ場合ハ關節囊ノ爲メニ骨折遊離端ノ轉位ヲ障礙セラル、ヲ以テ短縮ノ程度前者ニ比シテ輕度デアル、又骨折ノ兩端ガ喰合ヘル場合ニハ短縮起ラズ。

大轉子ノ位置、膨隆ノ如何ヲ觀察スルコトモ視診上必要ナル條件ノ一ツニシテ後述スル正確ナル測定ヲ待タズシテ練習ニヨツテ略ボ位置ノ上下、膨隆乃至陷凹ノ程度ヲ知リ得ルノデアル、其際常ニ兩側ヲ比較スルコト肝要ニシテ一側ノ大轉子ガ他側ニ比シテ高位ニアリ且ツ膨隆セル際ハ其側ニ於テ先天性股關節脱臼、外傷性或ハ病的股關節脱臼、或ハ股内臓症或ハ大腿骨頸骨折ノ存在ヲ想ハシムルノデアル、勿論各個ノ鑑別診斷ハ病歴及ビ他ノ診斷法ヲ參照スルコトノ必要ナルハ當然デアルガ單ニ大轉子ノ高位膨隆ノミノ視診ヲ以テ股關節ノ脱臼或ハ大腿骨頸ノ屈曲乃至骨折ノ存在ヲ推斷シ得ルノデアル。若シ兩側ノ大轉子ガ高位膨隆セル際ハ此等ノ疾患ガ兩側ニアルコトヲ推知セラル。

次デ局所ノ變化ナレドモ單ニ視診上ノ診斷ノミニ於テハ大ナル意義ヲ有シテハ居ラヌ、何ントナレバ最初解剖學上ノ所見ニ於テ述ベタルガ如ク股關節ハ他ノ關節ト異ナリテ極メテ深在性ニアツテ多量ノ筋族ヲ以テ包埋セララル、ヲ以テ多數ノモノハ外部ノ皮膚乃至皮下組織ニ迄變化ヲ起サズ、然レドモ股關節炎ニテモ炎症次第ニ擴張シテ關節周圍炎ヲ起シ漸次皮下組織ヲ浸害スル時ハ勿論局所ノ腫脹ヲ來タシ、若シ炎症ガ急性傳染性ナル時ハ腫脹發赤シ寒性ナル時ハ單ニ腫脹ニ止マル、茲ニ注意ス可キ事ハ股動靜脈ノ周圍或ハ大轉子ノ近傍ガ腫脹シテ恰モ寒性膿瘍ガ存在スルガ如ク見ユル際ニ其部位ガ股關節部位ニ近接セルヲ以テ股關節結核ヨリ來タレル寒性膿瘍ト速斷シテハ宜ロシカラズ、屢遠ク脊椎「カリエス」ヨリ又骨盤「カリエス」ヨリ流注膿瘍トシテ現ハレ來タルヲ以テ注意ヲ要ス。又小兒ニ於テ屢鼠蹊韌帶ノ直下ニテ股動脈ノ外側部ガ急ニ發赤腫脹セルガ如キハ急性粘液囊炎ナルコトアルヲ以テ之亦注意セネバナラヌ。(未完)